

芸術の定義, グラウンド, 非循環性
Definition of Art, Ground, and Non-Circularity

坪井祥吾

Abstract

What *form* should the definition of art take? This is the main question in this paper. In particular, I focus on the property of non-circularity as a constraint that an adequate definition of art must satisfy. Until now, this property has not been satisfactorily discussed in the philosophy of art. I propose to analyze it in terms of *meta-physical ground*. As a result, the concept of non-circularity will be clarified, and some definitions that have been erroneously criticized as circular will be shown not to be circular at all.

1 研究テーマ

芸術とは何か? この問いに答えることは、**芸術の定義**を与えることである。芸術の定義論にはすでに豊富な研究があり、たとえばある者は〈芸術作品とは、美的によいものを作ろうという意図を持って作られたものことだ〉という定義を提案し、またある者は〈芸術作品とは、ある特別な社会的文脈のもとで作られたものことだ〉という定義を提案する (cf. Davies[2], Stecker[11])。こうした定義を提案・検討することは、〈芸術とは何か?〉という問いに答えようとする点で、一階の研究だと言える。

一階の研究において数多くの定義が提案されると、それらの定義を評価・比較する必要が自ずと生じる。その結果、近年、〈適切な芸術の定義はどのような制約を満たすべきか?〉という二階の関心が高まっている (cf. Gaut[7], Lopes[8])。この種の研究領域は**芸術のメタ定義論**と呼ぶことができるだろう。私の関心もここにある。本論の狙いは、特に、芸術の定義に課せられる〈定義は**循環してはならない**〉という制約に対してある分析を与えることである。すなわち、定義の非循環性は**グラウンド** [ground] が持つ性質から派生するものだ、という分析である。この分析は、芸術の定義論に対して二つの重要な含意を持つ。第一に、非循環性という概念が明確化される。第二に、定義が循環的かどうかを評価する際にグラウンドの観点からそうすべきだと分かる。とりわけ後者は重要であろう、というのも、4節で見ると通り、非循環性の理解不足により不当な評価を受けていた芸術の定義が存在するだろうからである。

2 研究の背景・先行研究

本節では、(1) 芸術を定義するとはどういうことか、(2) 芸術の定義にはどのような制約が課せられるべきか、という二点それぞれについて、哲学者の間での共通見解を確認する。

一点目、芸術を定義するとはどういうことか。これの明確化には以下の二つの区別が役立つ。第一の区別は**実在的定義** [real definition] と**名目的定義** [nominal definition] の区別である。実在的定義は「*X* とは何か？」という問いに答えるための定義であり、名目的定義は「語『*X*』はどのように用いられているか？」という問いに答えるための定義だと言える。たとえば、(自然種としての) 水の実在的定義は〈水とは、 H_2O のことだ〉となるだろう。一方で、語「水」の名目的定義は〈「水」は、無色透明で無味無臭で... であるものに適用される〉となるだろう。そして、芸術の「定義」と言うときに意図されているのは実在的定義のことだと考えるのが自然である。というのも、芸術の定義論における根本的な問いは「芸術とは何か？」であって「『芸術』という語はどのように使われているか？」ではないからである。換言すれば、私たちの関心は芸術という種にあるのであって、「芸術」という語や概念にあるのではないのである。従って以下では、断りなく「定義」と言うとき、私は実在的定義のことを意味している。

第二の区別は、「芸術」という語の**分類的使用法** [classificatory usage] と**評価的使用法** [evaluative usage] の区別である (cf. Dickie[3])。分類的使用法は、「『モナ・リザ』は芸術だ」や「《4:33》は芸術だ」といった言明を典型例とするような用法で、与えられた対象が芸術作品というカテゴリーに属する/属さないことを述べる際の用法である。他方で評価的使用法は、芸術作品であるかどうかにかかわらず、何か並外れた特徴を持つ対象を評価する際に用いられる用法である。たとえば、「前田智徳のバッティングフォームはもはや芸術だ」のような言明において、「芸術」という語は評価的に用いられている。もちろん、芸術の定義論においては純粋に評価的な意味での「芸術」は無視すべきだし、実際にそうされてきた。というのも、再び、私たちの関心は芸術作品という種にあるからである。以下ではこの点を明確にするため、芸術の定義の被定義項を「芸術作品」として議論を進める。

以上より、芸術を定義するとは、〈**分類的な意味で**芸術作品であること**の実在的定義**を与えること〉だと言える。ただし以下では煩雑さを避けるため、「分類的な意味で芸術作品であること**の実在的定義**」のかわりに「**芸術の定義**」とすることにする。

二点目、芸術の定義にはどのような制約が課せられるべきか。本論では、〈**外延的妥当性**を満たせ〉という制約と、〈**非循環性**を満たせ〉という制約を取り上げる。まず、芸術の定義が外延的に妥当であるとは、語「芸術作品」の外延をその定義が過不足なく捉えている、ということである。芸術の定義は芸術作品であるものを**適切に選び出す**ものであってほしいことを考えると、定義

は外延的妥当性を満たすべきだと言えよう。実際、Stecker[11, p.14] いわく、外延的妥当性を満たせという制約は芸術の哲学者に広く共有されているものである。外延的妥当性については上の特徴づけによって十分に把握されるものとし、本論ではこの制約の適切さはこれ以上は問わない¹。

次に、芸術の定義が非循環的であるとはどういうことか。3節でも見るが、これがまさに本論の主題であり、未だ満足な議論が行われていない点である。よって、非循環性とはどのような性質であるかを、現段階では明確化することができない。だが、芸術の定義は芸術とは何であるかを説明するものであってほしいことを踏まえると、定義は何らかの意味で非循環的である必要があるだろう。というのも、一般に循環的な説明は悪い説明だとされるからである。実際、非循環性が定義にとって望ましい性質であることは芸術の定義論における共通見解になっているように思われる。詳しくは4節で見るが、たとえば Dickie 流の制度的定義にとって、それが循環的であることは大きな欠点であるとしばしば言われる (cf. Davies[2], Stecker[11])。これが欠点であるためには、非循環性の制約が受け入れられていなければならないだろう。

以上から、芸術のメタ定義論の目標を、**外延的妥当性と非循環性を満たすような仕方**で次の図式を埋めることとして設定することができる。

定義図式 芸術作品とは ϕ であるようなものことだ iff ... 芸術作品 ... ϕ ...

つまり、図式の右辺の「...」部の埋め方によって、外延的妥当性と非循環性を満たすようにするのである。ここで、最も単純なのは定義図式を次のように埋めることだろう。

純粋に外延的なメタ定義 芸術作品とは ϕ であるようなものことだ iff $\forall x(x$ は芸術作品である $\leftrightarrow \phi(x))$ 。

こうすると、たしかに外延的妥当性は満たされる。だが、非循環性は満たされない。というのも、たとえば $\forall x(x$ は芸術作品である $\leftrightarrow x$ は芸術作品である) は真であるため、〈芸術作品とは芸術作品であるようなものことだ〉という定義も許容されてしまうからである。これは循環的定義の最たるものだろう。従って、定義図式を埋める際に他に何か条件を追加しなければならない。しかしどのような条件を？これが次節で取り組む問いである。

3 筆者の主張

前節で確認した通り、定義図式を埋める際に、非循環性に対応するような条件を追加する必要がある。しかし、そのような条件を特定するためには、まず定義が非循環的であるとはどういうことかを明らかにしなければならない。

ただし、残念ながら、これまでの芸術の定義論においてこのことについての十分な検討は行われていない。たとえば、Dickie 流の制度的定義に対するお決まりの批判は〈それは循環している〉というものであり、それに対する制度主義者からのお決まりの応答は〈それは循環だが悪い循環ではない〉というものである (cf. Dickie[4], Davies[2], Stecker[11])。こうした議論の応酬は、特定の定義が循環的かそうでないかを争うものであって、循環という概念**そのもの**を問題視するものではない。この応酬からは非循環性そのものの明確化は得られないだろう。

そこで私は、非循環性は**グラウンド**の概念によって解明されるべきだ、と提案する。これは、近年提案されている**実在的定義一般**の分析に基づいている (Rosen[10], Fine[6], Correia[1])。興味深いことに、それらの分析は、実在的定義の非循環性はグラウンドの持つ性質に由来する、とする点で一致している。たとえば、Rosen と Fine はグラウンドと本質 [essence] という概念を用いて実在的定義を分析する。その結果、実在的定義の非循環性はグラウンドに由来する性質だとされる²。Correia[1] は、グラウンドと一般化された同一性 [generalized identity] という概念を用いて実在的定義を分析する。ここでもやはり、実在的定義の非循環性はグラウンドに由来するものとみなされる。この〈実在的定義の非循環性はグラウンドの持つ性質に由来する〉というテーゼを、**グラウンド-非循環性テーゼ** (略して **GN テーゼ**) と呼ぼう³。

本論の狙いは、GN テーゼが真であると論証することにはない。そうではなく、それが真だと仮定したときに、芸術の定義論に対しどのような含意があるかを検討することにある。そこで、本節の残りでは、まずグラウンドの概念を導入し (3.1 節)、次にグラウンドによって非循環性の概念を分析する (3.2 節)。その際、GN テーゼがさしあたりもっともらしいことは強調しておく。続いて 4 節で、GN テーゼの持つ芸術の定義論への含意を確かめる。

3.1 グラウンド

まずはグラウンドの概念を導入しよう。グラウンドは**説明的な**概念である (cf. Fine[5])。それは特に、非因果的で**決定的** [determinative] な説明である。たとえば、「なぜこの窓ガラスは割れたのか？」と問われれば、「その窓ガラスが脆いからだ」と答えることができる。だが、この説明は因果的ではない。というのも、窓ガラスが割れたことを引き起こしたのは、たとえばボールがぶつかったことなどであって、その窓ガラスの脆さ自体ではないからだ。これはむしろ、より**基礎的な**性質 (脆さ) に言及して、より**派生的な**性質 (割れたこと) の実現がいかにして決定されているのかを説明しているのである。グラウンドとはこの種の説明のことである。今の例では、〈この窓ガラスが脆い

ことが、それが割れたことをグラウンドする〉のように言う。

また、標準的には、説明的概念であるがゆえに、グラウンドは**非反射的**、**非対称的**、**推移的**であるとされる (cf. Raven[9])。まず、どんなものも自身を説明することはないように、どんなものも自身をグラウンドすることはない (非反射性)。つまり、 A は A をグラウンドしない。次に、説明の順序を逆転できないように、グラウンドの順序も逆転できない (非対称性)。つまり、 A が B をグラウンドするなら、 B は A をグラウンドしない。最後に、説明が鎖をなすように、グラウンドも鎖をなす (推移性)。つまり、 A が B をグラウンドし、 B が C をグラウンドするなら、 A は C をグラウンドする。

さらに、表記法も導入しておこう。本論では Fine[5] に倣い、グラウンドを文オペレーター \langle として表すことにする⁴。たとえば、「 p が q をグラウンドする」は「 $p \langle q$ 」と書く。また、「 a が F であることが a が G であることをグラウンドする」は「 $Fa \langle Ga$ 」と書く。「任意の x について、 x が F であることが x が G であることをグラウンドする」は「 $\forall x(Fx \langle Gx)$ 」と書く。

3.2 非循環性の分析

続いて、Rosen[10], Fine[6], Correia[1] に従い、定義の非循環性を次のように分析する⁵。これは、上で見た GN テーゼを形式化したものである。

GN テーゼ $\langle F$ とは ϕ であるようなものことだ〉という定義が**非循環的**である iff $\forall x(\phi(x) \langle Fx)$ 。

すると、定義図式は次のように埋められることになる。

GN メタ定義 芸術作品とは ϕ であるようなものことだ iff $\forall x((x$ は芸術作品である $\leftrightarrow \phi(x)) \wedge (\phi(x) \langle x$ は芸術作品である))。

図式の右辺の二つの連言肢が、それぞれ外延的妥当性と非循環性を反映している。よって、これは 2 節で設定したメタ定義論の目標を達成している。

本節の残りで、この GN メタ定義のさしあたりのもっともらしさを強調しておこう。そのために、私は以下の二点を指摘する。第一に、2 節でも見たように、定義が循環してはならないと考えたくなる理由の一つは、循環的な**説明**が禁じられるべきだということである。すると、定義の非循環性の分析にグラウンドという**説明的**概念を用いることは、ごく自然なアイデアであろう。第二に、次の明らかに循環的な二つの定義を考えよう。GN テーゼに従うと、これらの定義を適切に循環的であるとみなせる。この意味で、GN テーゼを組み込んだ GN メタ定義は私たちの直観的判断ともよく合致していると言える。

- \langle 芸術作品とは、芸術作品であるようなものことだ〉という定義。**直観的には**、この定義は循環的である。そして GN テーゼに従うと、これは

正しく循環的ということになる。というのも、グラウンドの**非反射性**により、任意の x について、 $\langle x$ は芸術作品である $\langle x$ は芸術作品である \rangle は偽となるからである。よって $\langle \forall x(x$ は芸術作品である $\langle x$ は芸術作品である $\rangle)$ は偽で、従ってこの定義は循環的である。

- \langle 芸術作品とは、時点 t より前で芸術作品であるか時点 t 以後で芸術作品であるようなものことだ \rangle という定義。直観的には、この定義は循環的である。やはり GN テーゼに従うと、これも（ある仮定のもとで）正しく循環的だということになる。というのも、（複雑な性質は単純な性質にグラウンドされるという原理を仮定すれば、）任意の x について、 $\langle x$ は芸術作品である $\langle x$ は時点 t より前で芸術作品である $\langle x$ は時点 t より前で芸術作品であるか時点 t 以後で芸術作品である \rangle というグラウンドの列が存在するだろうからである⁶。すると、グラウンドの**推移性**より、 $\langle x$ は芸術作品である $\langle x$ は時点 t より前で芸術作品であるか時点 t 以後で芸術作品である \rangle となる。それゆえ、グラウンドの**非対称性**より、 $\langle x$ は時点 t より前で芸術作品であるか時点 t 以後で芸術作品である $\langle x$ は芸術作品である \rangle は偽となる。よって $\langle \forall x(x$ は時点 t より前で芸術作品であるか時点 t 以後で芸術作品である $\langle x$ は芸術作品である $\rangle)$ は偽であり、従ってこの定義は循環的である。

以上より、GN メタ定義は直観的判断と一致する。一方で、GN テーゼを組み込んでいない純粋に外延的なメタ定義（2節）は、これらの直観的判断と一致しない。というのも、上の二例ではいずれも、定義項と被定義項が明らかに共外延的だからである。純粋に外延的なメタ定義に従うと、定義項と被定義項が共外延的でありさえすればそれは適切な定義だとみなされるため、上の二例も適切な定義だということになってしまうのである。よって、他によい候補がなければ、GN メタ定義の方を採用するのが合理的だろう。

4 今後の展望

以上を踏まえ、GN テーゼが真だと仮定したときに、芸術の定義論に対してどのような含意があるのかを明らかにして、本論を終えよう。含意は少なくとも二つある。一つ目は、非循環性についてより明確な理解が得られる、というものである。これはすでに3節で見た通りである。つまり、定義の非循環性はグラウンドが持つ性質から派生する性質だ、という理解である。一般に、議論で利用されている概念を明確化することは重要であろう。

二つ目の含意は、これまでに提案されてきた芸術の定義のうち、非循環性についての理解不足のせいで、不当に低い/高い評価を受けていたものがある

と分かることである。つまり、誤って循環的であるとみなされて却下された定義や、逆にその循環性に気付かれずに流通している定義があるのである。この点に留意することは、芸術の定義論においてフェアな議論を行うために重要だろう。

ここで、不当に低い評価をされた定義の一例として、Dickieの制度的定義を挙げておこう。これを検討することは、GNテーゼによる非循環性の明確化の利点を鮮やかに教えてくれるだろう。まず、その定義は次の通りである：芸術作品とは、アートワールドの観衆に提示されるために制作された種類の人工物のことだ (Dickie[4, p.80])。そしてこれに対するお決まりの批判は、〈Dickieは芸術作品の概念をアートワールドの概念によって定義するが、アートワールドの概念を芸術作品の概念に訴えることなく定義することは不可能であり、従ってこの定義は循環的だ〉というものである (Davies[2, pp.109-12], Stecker[11, pp.70-2])。しかし、GNテーゼに従えば、この批判は誤りということになる。というのも、たしかに任意の芸術作品 a の存在はアートワールドの存在にグラウンドされ、同時にアートワールドの存在はある芸術作品 b, c, \dots の存在にグラウンドされるだろうが、しかし a は b, c, \dots のうちには含まれないだろうからである。なぜなら、 b, c, \dots は a よりも時間的に先立って存在するはずだからだ。よって、ここにグラウンドの循環はないのである。

さて、上の批判者の誤りからは、次の一般的な教訓が導ける。批判者は、芸術作品やアートワールドという概念に関して——つまり**タイプレベル**で——循環があることから、与えられた芸術の定義が循環していると判断してしまった。しかしながら、GNテーゼに従えば、定義が循環的であるかどうかを確かめるには、任意の個別的な作品 a に関して——つまり**トークンレベル**で——グラウンドの循環があるかどうかを調べるべきだったのである。

以上の検討から明らかなように、提案された定義をGNテーゼのもとで見直すことは実りのある作業である。私たちは過去の定義からまだ学ぶことができるかもしれないし、逆に現在受け入れられている定義を修正する必要があるかもしれない。さらには、その個別的な定義の検討から、芸術の定義についての一般的な洞察が得られるかもしれないのである。それゆえ、この作業は間違いなく生産的だろうと私は思う。本論の意義は、芸術の定義をめぐる有意義な議論のためにはこの作業が不可欠だということを示した点にある。

注

¹ ただし、ここで想定されている〈定義に先立って外延が定まっておき、それを定義が捉える〉という描像は不正確かもしれない。というのも、芸術作

品は人工物であるため、どのような定義を人々（作者・鑑賞者）が受け入れているかが芸術作品の外延を部分的に決定しているかもしれないからである。たとえば、〈芸術作品とは、美しく作られた物のことだ〉という定義を受け入れるコミュニティにおいては、芸術作品の外延に美しくない作品（e.g., ダダイストの作品）は含まれないかもしれない。この**外延の心への依存性**を加味して、外延的妥当性の制約はさらなる明確化が必要だろう。この論点を指摘してくださった匿名の査読者に感謝する。

² ただし、Rosen と Fine の分析はやや異なる。Fine の分析のもとでは、実定的定義の非循環性はグラウンドだけでなく本質の持つ性質にも由来する。

³ 実は、Rosen, Fine, Correia らは、定義の非循環性だけでなく外延的妥当性（に相当する論点）についても論じており、その上で、外延的妥当性よりも**強い制約が必要である**とも主張する。本質 (Rosen[10], Fine[6]) や一般化された同一性 (Correia[1]) の概念が、そのような強い制約の設定に用いられるのである。本論では紙幅の都合上この点を論じられないため、以下では外延的妥当性の制約が適切であるという仮定のもとで議論を進める。

⁴ 正確には、<は**完全な** [full] グラウンドのオペレーターである。これと**部分的な** [partial] グラウンドは区別される (cf. Fine[5])。ただし本論では、議論の単純さのためにこの区別は無視する。

⁵ ただし Fine[6] は、グラウンドの文脈に現れる変数の束縛は、全称量化的に解釈すべきではないと論じている。紙面の都合上、この論点は無視する。

⁶ この列の最初の構成要素は、正確には < x は芸術作品である、 x は**時点 t より前に存在する** < x は時点 t より前で芸術作品である〉だろう。ただしこの場合、Fine[5] に従って、グラウンドのオペレーターの左辺には単一の文ではなく複数の文が現れることを許容していることに注意せよ。

文献

- [1] Correia, F. (2017). Real Definitions. *Philosophical Issues*, 27(1): 52–73.
- [2] Davies, S. (1991). *Definitions of Art*, Ithaca: Cornell University Press.
- [3] Dickie, G. (1969). Defining Art. *American Philosophical Quarterly*, 6(3): 253–256.
- [4] Dickie, G. (1984). *The Art Circle*, New York: Haven.
- [5] Fine, K. (2012). Guide to Ground. In Correia, F. and Schnieder, B. eds., *Metaphysical Grounding: Understanding the Structure of Reality*.

Cambridge: Cambridge University Press. 37–80.

- [6] Fine, K. (2015). Unified Foundations for Essence and Ground. *Journal of the American Philosophical Association*, 1(2): 296–311.
- [7] Gaut, B. (2000). The Cluster Account of Art. In Carroll, N. ed., *Theories of Art Today*, Madison: University of Wisconsin Press, 25–45.
- [8] Lopes, D. M. (2008). Nobody Needs a Theory of Art. *The Journal of Philosophy*, 105(3): 109–127.
- [9] Raven, J. (2015). Ground. *Philosophy Compass*, 10(5): 322–333.
- [10] Rosen, G. (2015). Real Definition. *Analytic Philosophy*, 56(3): 189–209.
- [11] Stecker, R. (1997). *Artworks: Definition, Meaning, Value*, University Park, PA: Pennsylvania State University Press.

(一橋大学)